

「モミジの生命力(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

モミジの生命力を示す、更に驚くべき例がある。先日、歩道を歩いていると、道端の雨水枡の蓋から緑色のものがのぞいているのが見えた。



最初は何かの草だと思った。植物の繁殖力は想像以上に強いので、アスファルトの隙間、石段の段差部分、屋根の上など、「もっといい場所なかったの?」と思うような、極めて悪条件の場所にも群生しているのを見かける。もともと土のない場所で発芽し、何とか育って枯れる。その枯死体(有機物)が積もって、少しずつ土壌を造っていくのだろう。これもその類だろうと思った。



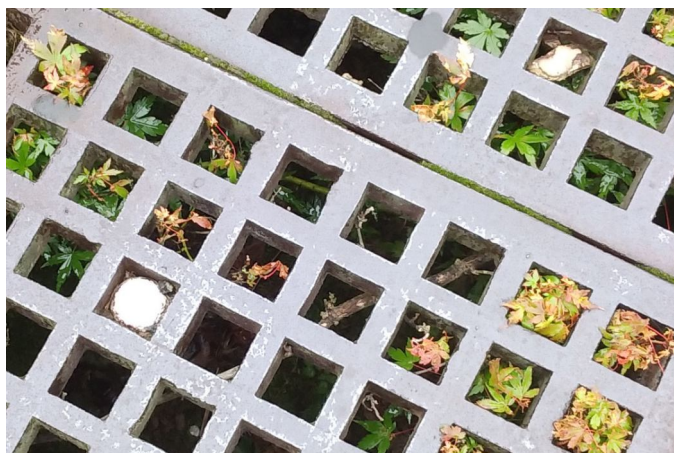
しかしどうも草としては様子がおかしい。これは草(草本)ではなさそうだ。その場にしゃがんで、中を覗き込んで観察してみた。近くを通った男性が、「何か落としたんですか?そこ、よく落ちるんですよ、ハハ!」と言って行ってしまった。



それは、何とモミジの葉だった。一枡ごとに葉が数枚。まるで「もみじ饅頭の詰め合わせ」のように行儀よく並んでいる。歩道にはモミジの木は一本もない。これは一体どういういきさつで、現在のような姿になったというのだろうか?



見ると、道路の反対側は「モミジ並木」になっている。ここから種子が飛んできて、芽を出したのだろうか?そうだとすると、こんな場所で芽を出して、根を張るだろうか?葉の量からすると、下には幹があるはずで、しかも、すべての雨水枡にモミジがあった。



やはり中には枝が見える。しかも、蓋から出てきた幹を切断したあともある。これは、道の向こう側のモミジの根がアスファルトの中を通過して、ここに出てきたに違いない。恐るべき生命力と云うべきだろう。